鄭州近郊の農村風景管見および「墨学と現代社会国際学術研討会」

岡本　光生

1　はじめに

2004年8月31日，9月1日の両日，中国河南省平頂山市魯山県石人山旅遊区の山荘，天龍賓館において，河南省社会科学院，河南省墨子学会の主催，魯山県当局の共催のもと，「墨学と現代社会国際学術研討会」が開催された。台湾からの3名，香港からの1名，アメリカからの1名，韓国からの1名，日本からの1名を含む総計75名の墨家思想に関心をもつ第一線の研究者，地元の研究者，実践家，ジャーナリストが参加し，3つのテーマについて36の発表が行われ，研討会は成功裡に終了した。

ここで，この研討会の概要と，あわせて二千数百年以前，孔子とその弟子たちが周遊した鄭州一帯の農村地域で眼にしたある光景を報告したい。

2　道端の光景

河南省魯山県石人山旅遊区は，鄭州から南西に車で約7時間のところにある。魯山への行き帰り，マイクロバスの車窓から中原平野とそれにつらなる丘陵地帯に広がる農村風景のなかに，何組かの，5・6頭のヤギをつれた農民の姿がみられた。わたくしが，今回，この研討会に出席した動機の一つは，この地域一帯が，春秋時代，孔子とその弟子たちの周遊した地域であったからだが，果せるかな，ヤギをつれた何組かの農民家族をみたのである。

論語・子路篇に

> 葉公，孔子に語りて曰く，吾が党に直躬なるもの有り。その父，羊を攘みて，子これを證す，と。孔子曰く，吾が党の直きもの，これに異なり。父，子のために隠し，子，父のために隠す。直きこと，その

中に在り，と。

とあって，ヤギを飼育する農民家族の存在することが想定されるのだが，まさにこうした事態のありえたことを実感したのである。

また，鄭州市街の南東約30キロにある鄭州空港にむかう途中，中牟への標識を眼にした。論語・陽貨篇に「晋の大夫，仏肸が中牟を根拠地にして反し，孔子を招いた。孔子は行こうとされた。子路がいさめた。孔子は詩を引用しつつし，『用いてくれる人さえあれば，用いられたいものだ』と嘆じられた」とある中牟がここを左に曲がった先なのか，と往事を思ってしばし感慨にふけった（以上の諸都市の位置関係については最終頁の概念図を参照されたい）。

3　墨翟の生地

墨家研究のシンポジウムがなにゆえに河南省鄭州から南西に車で約7時間行った魯山県石人山旅遊区で開催されたのであろうか。それには墨家の始祖，墨翟の生地がどこなのか，いわゆる墨子里籍問題がからんでいる。

「墨子」書の校訂に大きな足跡を残した畢沅は，墨翟の生地を現在の河南省魯山県，すなわち当時の楚の属邑，魯陽に比定し，一方，「墨子間詁」の著者，孫詒讓は，墨翟を山東省魯の人と比定した。墨翟魯人説はさらに展開し，現在においては，山東大学の故張知寒教授の主張する墨翟の生地を滕州市近郊小邾に比定する説が有力となってきている。しかし，元山東省社会科学院院長劉蔚華教授は魯山説も十分に成立する，小邾説よりも蓋然性は高い，と述べており，墨翟の出生地についての共通の理解は，いまだ確立していないのである[1]。

墨翟の生地をめぐるこうした学説の対立のなか，墨家研究の国際シンポジウムが92年以来4回にわたり，省級の国際会議として滕州市あるいは済南市で開催され，第5回（01年），第6回（04年）は，国家級の国際会議に昇格し，北京で開催された[2]。

これに対抗するかのように97年10月，魯山においてもまた「全国墨子里籍研討会」が開催された。このような，いわば郷土意識にもとづく対立の要素を含んで「墨学と現代社会国際研討会」が，このたび魯山で開催されたのである。

この研討会の参加者のなかにお国自慢的意識を有する地元学者が若干いたことは事実であるが，主催者の河南省社会科学院関係者も里籍問題が前面に出るのを危惧し，シンポジウムの構成にもそうした配慮がなされていた。「墨子の里籍についてどこだと思うか」と私的に質問されたさい，「墨翟の時代にあって，滕州も魯山も同一の文化圏を形成しつつあり，したがって墨翟の生地が滕州か魯山かは，かならずしも重要な問題ではない」と答えたのだが，前述したように，この地域一帯は，魯人孔子がその弟子たちとともに周遊した地域である。とすれば，孔子より後の墨翟の時代，地域の一帯性は強まりこそすれ，弱まりはしないのである。社会科学院関係の学者も，墨子里籍問題にとって，里籍が滕州であるか，魯山であるかは二次的問題でしかない，というこの答えになかば安心した表情をみせていた。

研討会が魯山で開催された背後には以上の経緯があるのだが，以下において研討会の内容を紹介したい。

注

(1)「墨子里籍新探」（張知寒　「山東社会科学」第六期　1988年），「墨子是河南人———兼論東魯与西魯的関係」（劉蔚華　「中州学刊」第6期　1982年）を参照されたい。

(2) これらのシンポジウムにおける報告は「墨家研究論叢」（1～6）に収録されている。（1～3　山東大学出版社　4・5　斉魯書社　6　北京図書館出版社）

4　研討会の内容

8月31日の午前には開幕式が行われ，魯山県共産党委員会の書記をはじめとする地方の基層幹部，また河南省社会科学院の学者官僚の挨拶が続く。出席者の多くは，前日の長旅の疲労にもかかわらず，耳を傾けていたのだが，わたくしは基層幹部の演説のうちに草の根の権威主義を感じつつも，中国語はなんと演説に適した言語であろう，などという感慨を抱いていた。

なお，わたくしも日本から来た学者として，日本と中国との墨家研究のありようの相違に言及しつつ，中国語で挨拶したのだが，出席者の多くは，日本人の中国語なるものへの好奇心にかられたようであり，あとである教

授から「あなたの普通話はよくわかった」とかなりの河南訛りで言われていささか恐縮した次第である。

なお，墨家研究の先駆者，アメリカ・アイダホ大学の李紹昆教授が，会の成功を予祝して七言律詩を朗誦し，閉幕式で中国墨子学会副会長，中国人民大学の孫中原教授がそれに和す，という，かつての読書人たちの社交を思い起こさせるうるわしい交歓もあった。

李紹昆詩

人桀地霊称魯陽	人桀地霊，魯陽に称い
墨子英雄披戎装	墨子英雄，戎装を披く
止楚攻宋伝千古	楚の宋を攻むるを止むること，千古より伝わり
兼愛尊天超老荘	兼愛尊天，老荘を超ゆ
山東山西交相利	山東山西，相利を交し
河南河北架橋梁	河南河北，橋梁を架す
非儒何妨尊孔子	非儒，なんぞ孔子を尊ぶを妨げん
百家争鳴譜新章	百家争鳴，新章を譜す

孫中原和詩

風景秀麗称魯陽	風景秀麗，魯陽に称い
遍地英雄披新装	遍地の英雄，新装を披く
墨学精華伝千古	墨学の精華，千古より伝わり
科学人文超老荘	科学人文，老荘を超ゆ
提唱兼愛交相利	兼愛を提唱し，相利を交し
古今中外架橋梁	古今中外，橋梁を架す
青年学子多才俊	青年学子，才俊多く
国際墨学譜新章	国際の墨学，新章を譜す

研究発表は，31 日の午後と翌 1 日の午後に行われた。以下に示すように全体は三部構成となっており，時間の関係もあって，31 日の午後は第一節および第二節の台湾・東呉大学の李賢中教授まで，翌 1 日の午後は残りの発表が行われた。

以下に開幕式の日程および研究発表の次第を示す。

墨学与現代社会国際学術研討会開幕式議程

第一項　魯山県委書記歓迎詞
第二項　河南省政協副主席・原鄭州大学学長・教授・博士生導師曹策問講話
第三項　河南省委宣伝部副部長講話
第四項　平頂山市委副書記講話
第五項　平頂山工学院院長・教授李徳平講話
第六項　河南省社会科学院党委書記講話
第七項　学者代表発言　孫中原　岡本光生　金東洙(韓国)　李賢中(台湾)　李紹昆(米国)　朱伝啓

研究発表

第一節　主題：邏輯・宗教・科学
主持人　張斌峰・高秀昌
発言人　李先昆：《墨経》中之符号理論（湖北大学哲学系）
劉培育：試論墨家的科学思想与科学方法（中国社会科学院哲学研究所）
田文軍：后期墨家的弁証思惟（武漢大学哲学学院）
孫中原：墨経的科学精神（人民大学）
郭　橋：西方邏輯的引入与《墨弁》研究新範式（河南大学哲学系）
関興麗：墨子的語意思想与 Aristotels 思想的比較研究（天津商学院）
銭永生：簡論《公輪篇》中墨家語用学
楊武生：論梁啓超・胡適・沈有鼎対墨家邏輯開拓性研究（人民大学）

第二節　主題：政治・経済・社会与文化
主持人　孫中原・郭　橋
発言人　李紹昆：墨子的愛与智（アメリカ・アイダホ大学）
朱伝啓：墨子的政治哲学（武漢大学哲学学院）
阿　墨：新墨家与現代文化（北京新時代致公教育研究院）
金東洙：墨家的共生哲学与世界和平（韓国・成均館大学）
陳道徳：墨家兼相愛交相利倫理原則的現代価値（湖北大学哲学系）
岡本光生：関于墨子的尚賢論（日本・埼玉工業大学）

張斌峰：墨家的社会価値観（南開大学哲学系）
王贇源：墨経的貨幣理論（台湾・台湾師範大学）
張暁芒：墨子的教育思想及其歴史命運（南開大学哲学系）
李賢中：墨子論用（台湾・東呉大学）
徐希燕：墨学与当代
戴茂堂：墨子義利観思想特徴探析（湖北大学哲学系）
蕭宏恩：兼愛精神在医護倫理中応用（台湾・元培科技学院）
周才珠：論和平崛起的墨学淵源（貴州広播電視大学）
秦彦士：論和平主義的当代価値（四川師範大学）
孫君恒：墨子精神与 Amartya Sen 的見解相似点（武漢科技大学）
高建立：墨子尚同説与専制性特徴分析（商丘師範学院）
鄭　光：論墨子尚徳思想（中国社会科学院）
周全徳：初論墨家倫理思想的現代価値（河南省社会科学院）
李永銘：墨子環境思想的現代意義（中南財経大学）

第三節　主題：里籍・生平与版本
主持人　蕭魯陽　楊暁宇
発言人　鄭桀文：墨子及魯勝魯陽的活動（山東大学）
任崇岳：墨子研究的重大突破（河南省社会科学院）
劉耀華：墨子里籍在魯山（平頂山市社会科学連合会）
田　静：墨子書的地域特徴（西安秦俑博物館）
郭成智：（無題）（河南省墨子学会石人山文化研究中心）
張新河：（無題）（河南省墨子学会石人山文化研究中心）
潘民中：（無題）（平頂山市政協）
張懐発：（無題）（河南省墨子学会石人山文化研究中心）

発表は発表者が発表文を朗読する形式をとったのであるが，レジュメあるいは発表全文が配付されるケースは少なく，多くの発表は発表者の朗読のみでなされた。そのためか質疑応答が活発に行われることはなかった。しかし，わたくしを含め発表全文をあらかじめ配付した学者もいたことはもちろんである。レジュメあるいは発表全文を印刷物にして配付しておくことは研討会運営において今後の検討課題となろう。

さて，発表テーマをみると，論理・宗教・科学をテーマとしたものが8篇，政治・経済・社会・文化をテーマとしたものが20篇，里籍・生平・版

本が8篇，うち4篇は地元学者の発表，となっており，日本における関心とは異なって，墨家の論理・科学にかかわる発表の相対的に多いことが注目される。

こうした傾向は，わたくしの参加した滕州，北京での研討会にもみられ，一九世紀末以来の墨家への関心の寄せ方——それは兪樾の「墨子間詁」によせた序に「近世西学中光学・重学，或言皆出於墨子，然則其備梯・備突・備穴諸法，或即泰西機器之権輿乎」とあるのにみられる——が現代においても持続していると言ってもよかろう。あるいは，1950年代の墨経研究の隆盛——墨経は，その内容が社会的問題にかかわることが比較的少なく，イデオロギー的性格が希薄なため，当時の学術と政治との微妙な関係にかかわることの少なかったことによる隆盛——の継続ともみられるよう(1)。

もちろん，墨経にみられる墨家の「邏輯学」の水準を疑問視する見解もみられるのであり，たとえば王路氏は

> 論理学の主要な内容が形式方面から推理を研究し，前提から結論にいたる推論において妥当な推論の形式を研究するものであるとすれば，墨経は科学的に整合的な体系を形成していたとはいえない。なぜなら墨経は，推論形式の研究と論述とを欠いているからである。

と述べ，さらに

> アリストテレスは命題の形式と推論の形式を研究し，三段論法による演繹システムを構造化し，形式論理学をつくりあげた。推論にたいする研究，論理学にたいする貢献についてはもちろんのこと，人類の思想文化への影響という方面においてもアリストテレスの論理学の成し得た成果は，墨経の論理学とは根本的に比較にならない。わが国の史学界の墨経の論理学にたいする評価は，明らかに過大であって，実態にそくしたものとはいえない。

としてその水準に否定的な評価をくだしている(2)。

第二節の発表のうち，李紹昆，朱伝啓両教授の発表は，いわゆる大御所の大所高所からの発表，阿墨氏の発表は墨家の兼愛思想にもとづき，青少年の矯正教育を実践している方の発表，みずから「新墨家」と称しておら

れる。

古代思想が現代における実践とかかわることについては，仏教やキリスト教では不思議ではなく，また儒教も「新儒家」などといわれているのであるから，「新墨家」があらわれても，すこしも不思議ではない。ただ，宗教的性格を有しながら，しかしかつて中国社会に受け入れられなかった墨家思想の運命を考えるとき，今後，この運動がより広く，より深く中国社会に浸透していくかどうか，さだかではない。

また，台湾の蕭宏恩女士の発表は，看護の現場に墨子の兼愛思想を活かすという発表であった。墨家の思想が看護の一助となれば，これにすぐるものはない。

孫君恒氏は武漢科学技術大学文法学院の助教授，「貧困問題与分配正義：Amartya Sen 的経済倫理思想」（中国当代出版社　2004 年）という著書もあるのだが，新進気鋭の経済学者が「墨子」を読む，というのもわが国にはあまりみられない知的風景ではある(3)。

他の発表は，おおむね概説的な発表であった。そうしたなか，わたくしの発表は墨子の尚賢論を孟子のそれと対比しながら論じたもので，一定の評価を得たように思われ，閉幕式の総括において孫中原教授がわざわざ言及しておられた。

第三節は，墨子の里籍問題を取り上げた発表が主であって，郭成智氏以下の発表は石人山文化研究中心の構成員と地元の研究者（いわば郷土史家）の発表であった。

総じて，中国における墨家への関心――19 世紀末の「墨子発見」以来持続してきた関心でもある――が，この研討会においても，また示されていると言えよう(4)。

かれらにあってそうした関心のありようはごく自然であり，むしろ，現在的関心から切り離されたかたちで「墨子」を問題にする日本人の研究のほうが不可思議なのかもしれない。わたくしも「あなたはいかなる関心から墨家を研究しているのか」と問われて，いささか窮し，「歴史的関心から」と答えたのだが，たしかに自問する価値のある課題であろう。

9 月 2 日は，墨翟の旧宅（！），墨翟が「墨子」書を著述した「墨子著述楼」（！），墨翟の弟子相里氏，相夫氏の子孫が住む村落（！）などを見学したのだが，同行の俊英たちは思わず苦笑いをしていた。

注

(1) 曽繁仁「千年“絶学”的偉大“復興”——墨学研究的百年回顧与前瞻」は解放後，1950年代の墨経研究の隆盛の原因をそこに求めている（「墨子研究論叢」5　三九九頁　2001年　斉魯書社）。同様の見解は鄭桀文「20世紀墨学研究史」（清華大学出版社　2002年）251頁にもみられる。

(2) 王路「墨経邏輯研究中的問題和方向」（「中国哲学史」1994年第1期）。なお，この指摘にたいして張永義「墨子与中国文化」（貴州出版社　2001年）は，この指摘を「やや過激な問題提起ではあるが，しかし，たしかに深く考慮するに値する問題提起ではある」と評価している（前掲書　386頁）。

(3) 数少ない例として近代経済学者が荀子を読み，興味深い議論を展開しているケースをあげることができる。岡本哲治「天と人と国」（芸立出版　1986年）。

(4) 中国では「墨子」の専門家，「孟子」の専門家というように区分けをする傾向が強く，「墨子」を先秦諸子の諸思想との共通性とそれを踏まえたうえでの特色を明らかにするという観点，すなわち対比，比較の観点から分析する研究は比較的少ないように思われる。

5　おわりに

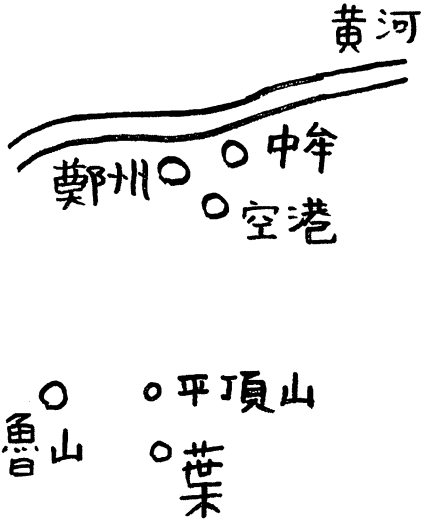
このたび，旧知の研究者と研究の現状を語り合い，また新たな研究者の研究状況を知り得たことは，今回の研討会に参加して得た収穫であった。また，副産物として以下の二点を挙げることができる。

鄭州と魯山との往復にヤギの群れをつれた農民家族の姿を何度かみかけたこと。

詩の贈答の現場を目撃したこと。

なにか副産物であるべきものが主産物となってしまったが，それはそれでいたしかたないであろう。

なお，今回の会議の費用は往復の交通費をのぞいて，すべて主催者側が負担した。感謝に耐えないのではあるが，このような状況がいつまでも可能だとは思えない。今後は，参加者にも応分の負担を求めるべきであろう。費用の問題にかんしては，滕州の主催する会議も同様であり，前回の第5回は国防大学と共催し，今回は地元の証券会社，不動産会社の援助を仰いだと思われる。おかげで，参加者は北京の最高級ホテルに滞在することができたのだが，「仏の顔も三度」という言葉もあるくらいだから，これから

以降もスポンサーになってくれるかどうか，不安があり，といって新たにスポンサー探しをするのも困難であろう。そろそろ参加者が応分に費用を負担する方向に転換すべきであろう。「学会」の「中立性」，参加者の「中立性」に疑問を持たれないためにも必要なことであろうから。

概略図